



国指定名勝

旧藏内邸



藏内鉦業と

藏内家の歴史展



写真と資料でみる 藏内鉦業の歴史

大正時代の峰地炭坑(田川郡添田町)

会期 令和8年3月12日(木)~5月26日(火) *水曜日休館(4/29と5/6は開館)
会場 旧藏内邸 福岡県築上町上深野396番地 電話 0930-52-2530
時間 9:30~16:30 入館料 大人310円 / 小中学生100円

ギャラリートーク 展示解説と三子銅像広場見学

伝藏内次郎作胸像と三子銅像広場の調査に携わった田中先生の解説で展示と銅像広場を見学します。

講師：田中 修二(日本大学芸術学部美術学科教授)

日時：令和8年4月29日(水/昭和の日) 13:30~15:00

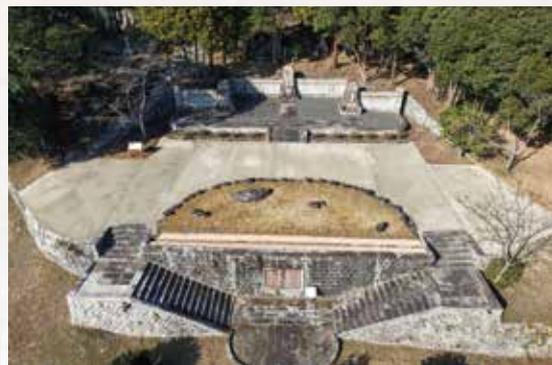
会場：旧藏内邸 宝蔵と銅像広場(展示見学後、移動します)

定員：30人 参加費無料(ただし入館料が必要です)

申込：文化財保護係(TEL0930-52-3771)にお電話でお申し込みください。



旧藏内邸(北側から遠景)



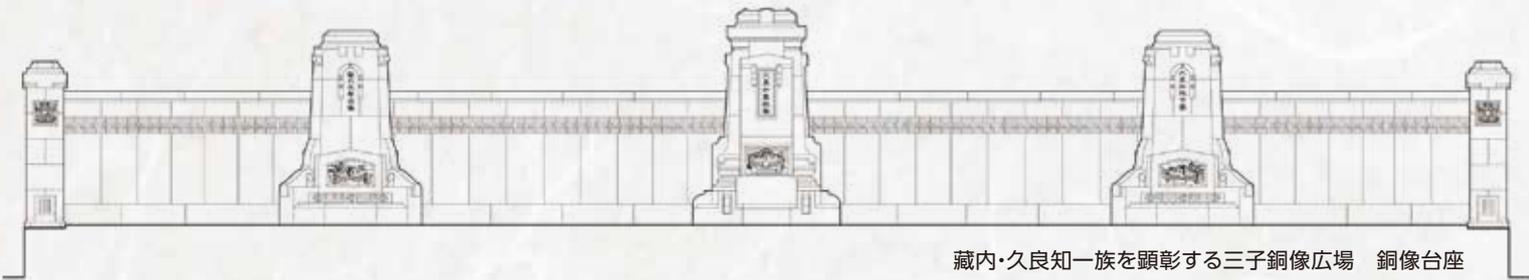
藏内・久良知一族を顕彰する三子銅像広場

講師プロフィール

田中 修二 (たなか しゅうじ)

1968年京都市生まれ。成城大学大学院文学研究科博士課程後期修了。博士(文学)。大分大学教育学部教授をへて、現在、日本大学芸術学部教授。専門は近代日本美術史、特に彫刻と京都の絵画。屋外彫刻調査保存研究会運営委員。主な著書に、『近代日本最初の彫刻家』(1994年)、共著『竹内栖鳳とその弟子たち』(2002年)、編共著『近代日本彫刻集成』全3巻(2010-13年)、『近代日本彫刻史』(2018年)、『福田平八郎 人と言葉』(2024年)など。





藏内・久良知一族を顕彰する三子銅像広場 銅像台座

1. 藏内家と久良知家

藏内家と久良知家の名は筑豊の炭鉱経営者として知られますが、古くは「藏内」と書いて「クラチ」と読む同族でした。

藏内家は中世、旧藏内邸のある城井谷を拠点に、この一帯を治めた豊前宇都宮氏の家臣の末裔で、近世以降は代々庄屋を務めました。明治時代初期に一族の長である久良知重敏(1829-1909)が久良知(クラチ)の万葉仮名の文字を使い、久良知家を興し、その後、藏内家は「クラウチ」と読むようになったといわれています。

旧藏内邸が藏内家の本家住宅として建設された明治39年頃(1906)、藏内家と久良知家の共同による炭鉱経営は軌道に乗り、さらなる繁栄へと向う時期でしたが、明治21年(1888)に久良知家の長男、政市が、後継者の次男、寅次郎も明治35年(1902)に、長老の重敏も明治41年に亡くなりました。

そして後継者となった藏内家の藏内次郎作(1847-1923)は炭鉱経営を養子の保房(1863-1921)に任せ、明治41年(1908)以降は衆議院議員として活躍しました。

2. 藏内鉱業株式会社の設立

大正5年(1916)、藏内保房は藏内鉱業株式会社を設立し、社長に就任しました。そしてこの年から大正9年まで、接客空間の必要性により、旧藏内邸を増築しました。

また保房は本邸完成の記念に、県道前の大鳥居からの長い参道と貴船神社、さらに一族を顕彰するため、築上町上深野の田園風景を見下ろすように、西山麓に久良知重敏、久良知政市、藏内次郎作の三人の銅像を並べた広場を造営しました。



藏内次郎作(石炭積出港) 久良知重敏(上深野の農村) 久良知政市(田川の炭坑)
三子銅像の台座に埋め込まれた陶板製のレリーフ(銅像は戦時供出により消失)



久良知寅次郎(銅像)
(1866-1902)



藏内次郎作



藏内保房



大鳥居・参道・貴船神社と旧藏内邸
(奥の山際に三子銅像広場)

3. 藏内家と久良知家の鉱山経営

両家による鉱山経営は明治16年(1883)頃に始まり、昭和34年(1959)の尾平鉱山(大分県豊後大野市緒方町)の閉山までの約75年間にわたります。

その歴史の前半は峰地炭坑(田川郡添田町)や大峰炭坑(田川郡大任町)に代表される筑豊や北九州を拠点とした炭坑であり、明治から大正時代にかけて最盛期を迎えました。そして藏内次郎作、保房の亡き後は藏内次郎兵衛(1892-1967)と正次(1893-1951)兄弟が経営を引継ぎ、昭和14年(1939)に峰地・大峰炭坑を古河鉱業に売却し、炭鉱から撤退します。

炭鉱撤退後は、錫を主力とした金属鉱業「藏内尾平鉱業所」へ大転換を図りました。



峰地一坑坑口(田川郡添田町)



峰地一坑選炭場(田川郡添田町)

4. 伝藏内次郎作胸像と久良知寅次郎銅像

藏内次郎作は、田川郡の発展に貢献した功績により、鎮西公園(田川市)の一面に銅像が建設されました。制作は朝倉文夫(1883-1964)に依頼され、大正7年(1918)12月に契約が締結されました。銅像は、フロックコート姿の直立像で、高さ一丈六尺(4.85m)ありましたが、戦時中の金属供出で消失しました。胸像はその習作の可能性が高く、若い頃の次郎作を表現したとも考えられ興味深い作品です。

久良知寅次郎は慶応2年(1866)、築城郡上深野村(築上町)で生まれ、村上佛山の水哉園で漢学を学び、兄の政市や藏内次郎作と共に炭鉱経営に携わりました。明治31年(1898)には衆議院議員に当選しています。銅像は大正8年(1919)に建設され、現在は台座のみ法光寺(田川市)境内にあります。制作は近代彫刻の先駆者、長沼守敬(1857-1942)で、戦時中の金属供出時、頭部を切断し保管されました。今回、藏内氏と久良知氏の銅像が同時公開されます。



伝藏内次郎作胸像
背面に「文夫作1918」とある。



法光寺境内の銅像台座
現在は親鸞聖人の銅像が立つ。
台座側面には「長沼守敬」とある。



銅像台座の文字を拡大